

ZENマウンテンセンター

夏安居に参じて

沖田玉映

ロサンゼルスから車で二時間半離れたマウンテンセンターは地名のとおり山脈の中にあつた。このZENマウンテンセンターにて五月二十九日から九十日間の修行が始まった。

当地で最初に感激したのは、雄大な自然と紺碧色の青空であった。岩や山肌が直接見える山脈は、どちらかといふとサバク気候型に近い。どうしてこんなに空が青く澄みわたっているのだろう。少しでも雲を見つけるとほつとするほど、ほとんど毎日快晴がつづいた。生まれて初めて野性のサボテンを見た。日中は日差しが明

く乾燥しているため、樹陰は嘘のように涼しい。

ふと、はるか昔、遠い印度で長い布教の旅をされた釈尊が大樹の木陰で休まれた光景を思い浮かべた。夕方になると急に温度が下がり、セーターや寝袋を着こんだ。夜ともなれば、空気が澄み、満天の星空が広がる。星の多さに、北斗七星をすぐに見つけられないほどだ。

晨朝三時四十五分に振鈴(起床)、夜は九時に開枕(就寝)。しかし、外は暗闇の中、足元を月の光が照らしてくれる。電気のある生活に馴れてしまっている者には、こんなにも月の光が明

るいものかとあらためて知らされる。

冬になるとあたりは雪に埋もれる。松、桧、チーク等が逞しく見事に成育している針葉樹が多い。特に松は、日本なら天然記念物になるぐらいの大きな松がいたるところに聳えている。松の木のことを英語で「パイントウリー」と呼ぶ。松^{まつ}毬^{ぼく}がパインぐらの大きさだ。まるで松の木にパイナップルがなつていて見えるようだ。

極暑の夏、よく目をみはれば、野草がひとつそり可憐に凛しく咲いている。知つているもののが名をあげると、のこぎり草、パー^ペブルルピナス、ぬこじやらし、笹桔梗、水引草、ブライダルベール。おみなえしによく似た花も見える。

この松や野草を連想させるかたが、実道、安養ご夫妻である。お二人は、前角老師の高足であられ、年間通してこのZENマウンテンセンターを管理されている。

実道先生は日中、ブルドーザーを動かしてみの先頭に立つて作務（労働）をされる。わが国の金沢の大乗寺にて修行された経験を持つておられ、われわれ修行僧に対してもやかな心配りをされる。ダルマトーク（説教）のとき、接心会（一日中、坐禅をしている特別な期間）に、こうして大勢のかたがたと一緒に坐禅をし、話ををする機会を得て大変にうれしいと話される。

奥様の安養さんは金髪のうりざね顔の美しいかたで、昨年、誕生した赤子を背中においながらテキパキと働きまわる。お互に助け合いながら、ZENマウンテンセンターにくる人に笑顔をたやすくお世話をされる。その菩薩行の姿に、小尼はいつも心の中で合掌をする。

平生は午前中に約二時間半の作務を全員で行う。小尼はずつと典座寮^{てんざりょう}（台所係）であつた。典座寮の主任（典座）は、ファコンというパートナーを管理されている。

ランドから来た三十二歳の女性であつた。かの女はヨーガから禪に興味をもち、前角老師の高足である元峰先生より戒を受けられた。父親がオランダ人、母親がフィリピン人という。もう一人は、パンとお菓子係を担当するグレーク。かれは二十二歳の米国青年である。

三ヶ月の安居中（修行期間中）はすべて精進料理であつた。ただし日本の精進料理とちがい、バター、ミルク、チーズ、ハチミツ、ピーナッツバター、ヨーグルト、クリームなどの乳製品を豊富に使うため、とても栄養価が高く、こちらの人々がコレステロールを気にすることなく理解される。

朝はコーンフレークに似た「グラノーラ」というナツツなどの木の実や大麦小麦をミックスしたもののはうえにハチミツ、ピーナッツバター、ミルクをかけて頂く。ときには、オートミールや「レスク」と呼ばれるトウモロコシの粉に水

ファコンとグレークと筆者（左）



を加えて、それを加熱しながら練つたものを頂くこともあつた。まわりの人々が小尼に「日本食が恋しくないか」と声をかけて、心配してくれたが、米国へ来てまで日本食を頂くようでは何の為に留学したか意味がない。その国の文化を知るためには、その国の食物を頂くこともその一つであると思う。幸に何を頂いても美味しくおぼえた。

こちらの包丁の使い方は押し切り、つまりズツ切りである。お米は洗わず、直前に、しかるべき分量の水を入れて炊く。日本料理は素材の自然の味を引き出し、色合いを大切にすることをむねとするが、こちらは総合の味を如何に美味しくするかにポイントを置くようである。それゆえ、沢山のスペースを使い、色合いを気にかけない。

典座寮の仕事は、まず第一に決められた時間内に食事を作らなければならぬ。三度三度、

口に入るものであるから、手を抜くことは決してできない大変な仕事である。まだこちらの生活に馴れていないうえに、言葉の不自由な小尼にたいして他の寮衆はさぞ大変であつたろうと思う。小尼が米国料理を覚えて帰りたいといえば、忙しいのに、材料はこれとこれといつて親切丁寧に教えてくれた。典座和尚はよくできた人で、どんなことがあつてもけつして怒つたり、強い口調でいうことはしない。グレーケは小尼が甘い物が大好きだと話すと、いつもできたてのパンやクッキーを味見しろともつてきてくれる。

こんな事も思い出す。ファンコンが本を見ながら一所懸命海苔巻を作つた。小尼に「食べてみて」とさしだした海苔巻は、ほししいたけを水で戻せん切りにし、何の味付けもしていない生のままを、わさびと一緒に入れて巻いたものであつた。一口ほうばつたとたんに、外米(ス

テック米) のご飯が、ボロボロと落ちる。赤酢を用いご飯が紅色している。せつかく作つてくれたものを、今さらあれこれいうわけにもゆかず“Good!”(おいしい)と、本人はとても喜び、メンバーのみなも“Sushi,Sushi(寿司、寿司)”と言つて喜んでくれた光景を思い出す。

典座和尚は、料理を作るばかりでなく、典座寮を清潔にすることも忘れない。高祖様の著述された『典座教訓』(食事作りをする心構えを示した教え)を拝読されたのである。その書物の一節「一茎草を念じて仏殿を建立する」というお示しのとおりフアンコン師は普通の家庭ならば捨ててしまうものでも、使えるものはすべて使うという気持ちを実践された。三ヶ月間、同じ料理を作つたのは数える程しかなかつた。ZENマウンテンセンター夏安居参加のメンバーは次のとおりである。三ヶ月間ずっと修行する人。仕事の都合上、とびとびに参加する、

いわば流動的な人。多い時で約七十名を数えた。遠くはヨーロッパや南米からこの山まで飛行機や車を乗り継いで来たものもいた。これは、まさに前角老師の徳風の広さと深さの賜物ということができる。

米国社会の人間関係は横の関係とみられる。センターにおいては、前角老師が絶対なる存在者であり、あとのメンバーはみな対等(友達)の関係である。

みな老師様を尊敬し、敬慕し、大切にしている様子が膚で感じられる。

毎朝、作務ミーティングが野外でもたれる。まず全員で、『消災妙吉祥陀羅尼』を立札で唱えてから、ミーティングが開始される。立つたまま、片手にカツプを持ち、コーヒーやティーを飲みながら話が進められるおおらかさに、少しく驚いた。

おおらかさといえば、ここは一ヶ月に一度し

か雨が降らないので、たまたま雨が降つて来たときに、小尼が洗濯物を取り込もうとしたら、「じきに乾くから、そのまままでよい」といわれたことがあつた。ここではどんなに忙しくても走る姿は見かけない。いつも小走りに駆けているのは、よく考えたら小尼一人だけであつた。日本にいたとき、いかにせわしなく動いていた

かを思い知るに至つた。

さて、無事に三ヶ月の夏安居も終日を迎えた日に、法戰式と合わせて陽光寺ご開山、仙外道雲大和尚休広忌(七回忌)、および当センターの開山堂落慶法要が挙行された。

はるばる日本から志保見道元老師ご夫妻と随行十五人が隨喜された。見晴らしのよい山の中



腹に仙外道雲老師の無縫型の墓碑が建てられ、そこに日本から請来された老師のご分骨が納められた。納骨および墓碑開眼の供養がねんごろに當まれた。

その後の昼食会の席で、道雲老師と前角老師との素晴らしい出会いのことともにますます仏法が栄えていくZENマウンテンセンターの姿に泉下の道雲老師は、きっと法悦されておられることが拝察する。前角老師にも、さらなる法臘延長と福寿無量をただただお祈りするのみである。

このセンターには、だれでも“Welcome!”といつて受け入れる寛大な心がある。例えば、応量器の扱い方も米国スタイルとか日本スタイルとかいって、お互いに笑つてみせるけれど、仏様から見たら何々スタイルなどないかも知れない。すべてにわたつて善し悪しなどはないのかも知れない。善惡や何々スタイルなどと區別

をつけるのは、己自身の我見によるものであることが、日本を離れたアメリカの地であらためて知ることができた。

このすばらしい大自然の中で修行させて頂くご縁を心から感謝したい。松林に囲まれた禪堂で坐禪し、己自身が我見をとりはずした真さらな自分にならなくては、と心に念ずる。そして、本当の自然つまり無情説法の何たるかを自分に問いつづけている。小尼は、この雄大にして悠然とした大自然にはぐくまれて、少しでも大きな人間になつて帰りたいと切望している。

気がついたら、「光陰矢の如し」といわれるよう、九十日間の夏安居はあつという間に終わってしまった。大勢の方々にお世話になつた。空になつた自分の部屋で頭こうをたれる。縁有れば再びここを訪れることができよう。縁無ければこれが最後と思い、ZENマウンテンセンターの山を降りたのであつた。合掌